

0

どこまでも、軽い男だったな。

タンクにぶかぶかと浮かぶ男の死体を見下ろしながら、茨木香椎はふとそう思った。「酒に溺れる」とはよく言ったもので、たった今彼女が見下ろしている状況というのがまさにそれなのであったが、一方でこの男がそこまで清酒というものに思い入れを抱いていたのかと問われれば、それはそれで首を傾げずにはいられなかった。

そう、この男はただの薄っぺらな男。金と女に目が眩み、お酒はついで。この男が着ているあまりにも似合っていない高級スーツと同じ。

私は、そんな男になんて――。

ふと、蔵の壁に掲げられた先代の写真に目をやる。

額縁の中で先代・鴨志田久蔵はただでさえしわくちやの顔をさらにしわくちやにし、ぽっかりと口を開けて笑って

いた。杜氏という肩書に仄かな誇りを抱きつつ、そのくせあまり酒を受け付けなかった乾いた口腔。

ごめんね。私たちの「賀茂香」を、だめにしちやって。でもこれで、きつと蔵は守られる。必ず、守ってみせる。

先代の前でしばし立ち尽くしていた彼女は、おもむろに腕時計を一瞥すると、蔵の出口へと向けて歩を進めた。

迷っている暇はない。早く安芸津の蔵へ戻らなくては。あんな奴のせいで、蔵を台無しになんてしてたまるものですか。

私にはね、もう誰一人として代わりはいないのよ。

1

「お休みのところ大変失礼致します。広島県警八本松署の佐々木です。突然のご連絡申し訳ございません。こちら、鶴寿酒造の茨木香椎さんのお電話でお間違えないでしょうか」

未だ春が到来する様子もなく、息を吸うと空気の冷たさに喉がすつとする三月の未明。事情は分からなくもないが、

夜の帳も開かぬうちから電話を寄越してきたこの佐々木という刑事に香椎は一抹の不満を覚えた。

「……佐々木さん、でしたっけ？ 今一体何時だと思ってるんです。まだ朝の六時ですよ」

「申し訳ございません。先ほど、お宅の従業員の幾嶋さんから通報がありまして。お宅の酒蔵から男性の死体が発見されたというんですよ。つきましては責任者の方にも是非、お話を伺いできればと思うのですが」

知ってるわよ。

香椎は内心呟くと、今後の受け答えをどうするか改めて思索していた。

「死体って、事故なのかしら」

「事故、といえば事故なのでしょう。ただ——」

「ただ？」

「——発見された男性なんです、どうやら蔵への不法な侵入者だったようでして」

「侵入者？」

「違いわ。私が入れたのよ。」

「四神酒造の水元陸みなもとりくさんをご存知でしょうか」

「……ええ。うちの蔵の買収に躍りだった——何、あの男が見つかつたの」

「はい。大分酔っていたんでしょね。タンクの上にある足場から足を滑らせたのではないか、というのが、大方の見解です」

「わかつたわ。とりあえず八本松の蔵へ向かえば良いのね。四〇分ほど待つて頂けるかしら。今、安芸津にある知人の蔵にいるのよ」

「承りました。お待ちしております」

音もなく通話を切ると、深くため息をつき窓の外を見る。群青の空は一面澄み渡り、遠く広がる瑠璃色の瀬戸内海は朝風に静まりかえっていた。

——このまま、永遠にこの景色を見ていたい。

何気なしに思うと、すぐにはっとして我に返る。なんでそんなこと思ったのだろう。こんなところでぼおつと海を眺めている暇はない。私は帰るべきところに帰らなくては。

香椎は座ったまま取り急ぎ荷物をまとめ、顔を洗うため一度洗面台に向かうことにする。

そう。きつと夜遅かつたから疲れているのよ。

香椎が立ち上がったその時、吹き始めの海風が彼女の髪をなびかせた。

窓を閉めなくちや。

窓枠に手を触れる。窓の向こうでは、先ほどまでは鏡のように平らだった海面が、風に揺られ、緩やかに、しかしながら大きく波打ち始めていた。

鶴寿酒造が所有する蔵は、JR西条駅からさらに北西へ数キロ進んだ黒瀬川沿いに建っている。人はおろか、車の通りも少なく、夜明けからはそう時間が経っていないにもかかわらず森に遮られあたりはまだ薄暗い。香椎がリトルカブで蔵へ到着すると、漆喰の蔵はパトロールカーの赤色灯で照らされ、空の蒼、森の緑で悪趣味なコントラストの一端を担わされていた。

「お待ちしておりました。茨木香椎さんですね」

「そういうあなたは佐々木さんかしら。この度はお世話になります」

香椎は深々と頭を下げると、同時に相手の頭からつま先

までじっくりと観察した。

ぼさぼさの頭部に皺だらけのスーツ。革靴だって光沢をなくしてよれよれじゃない。表情とかも無駄に硬いし、変に体育会系こじらせてて融通が利かなさそう。

これなら、騙せる。

「それで、蔵の様子はどうなっているの。あの男、余計なことしないでしょうね」

「それなんです——」

少しにらみつけてやる。こういう人には、この蔵の主が誰であるか示しておいて損はないだろう。

佐々木刑事が息を飲むのが伝わってくる。沈黙を保ってしばらくしていると、今度は蔵から頭部のさびしい小男がひよこひよここと駆け寄ってきた。

「香椎さん、お帰りになったのですね……!!」

「幾嶋さん」

「本当に申し訳ありません、私が、不用心であったがために、大事な」

「落ち着いて。ゆっくりでいいから、何があったの」

息も絶え絶えになっている幾嶋をなだめながら、佐々木

を改めてにらみつける。

「現場へ案内しましょう。そのほうが早い」

一夜にして事件現場と化した蔵は、いつもに増して人口密度が高くなっていた。証拠を消さないようにとか一応気を遣って、完全防備でうろうろしているのだが、彼らはここが飲料品の工場だと理解しているのだろうか。

「あちらの酒を貯蔵するタンクで水元氏は溺死したようです」

「肺の中まで酒まみれ。文字通り酒に溺れたのね」

「……まあ、そういうことになりませぬ」

少し、変に思われただろうか。佐々木の様子を伺うと、当の佐々木は香椎の様子などお構いなしとでもいうようにタンクの上に掛けてある足場へ——その上でもぞもぞ動く影へじつと眼を向けていた。

「何をしているのッ！」

香椎はついはっとして声を張り上げる。蔵中に響き渡る声が収まらないうちから駆け出すと急いで階段を上り、影

の正体を捉えた。

「なんでうちの蔵に小娘を入れ込んでいるのよッ！」

足場にうごめく影——そこにいたのは、ぶかぶかのワイシャツに小柄な体躯と不釣り合いなネクタイを締め、三つ編みのおさげをぶらぶら揺らしたいかにもイモっぽい小娘。

「あんた何なのよ！ 警察は何をしているのよ！」

「茨木さん落ち着いてください！ 彼女は——」

「落ち着いてですって！ なんなのよあの子なんであんなわけのわからない子がここにいるのよ！」

階下にいる佐々木に怒鳴り散らす。右手の指先を小娘のほうへ向け、左手は爪が食い込むほど強く握りしめていた。

再び小娘のほうへ目をやる。小娘は、先ほどまでじつとタンクを覗いていた視線をやっと香椎のほうへ向けると、とぼけたようにかけている黒縁眼鏡の蔓を指さした。

「そうよ、あなたよ。あなた、なんなのよ」

息を切らし声のトーンを落とす。一方の小娘はようやく状況を理解したのか、ああ、という間抜けな声と共に身に着けているベルトポーチの中身をこそごと探りだした。

「あ、あつたあつた」

小娘はベルトポーチからやつとの思いで焦げ茶色の物体を引つ張り出すと、トコトコと香椎のほうへやって来る。

「小娘って歳でもないんですけどねー。私、こういう者ですー。えっと」

焦げ茶色の物体——手帳だろうか——を開陳した小娘。

「警部補——ミツ？」

「広島県警刑事部、捜査第一課警部補、本件の捜査主任。

水津<sup>すいつあまみ</sup>天海ですー。肩書きが長くてすみませんね、この度は

お世話になりますー」

そこには、「警部補 水津天海」と厳めしく表記されていた。

いた。

一通りの挨拶を済ませると、香椎は取り調べを行うからということ蔵の傍にあるプレハブの事務室へと移されていた。

「被害者は水元陸さん四八歳。大手の量販型酒造メーカー、四神酒造の専務さんですねー。あ、あと現社長の息子さんらしいですよ、いわゆる御曹司ってやつですねー。」

昨夜<sup>ゆうべ</sup>、深夜の二時頃に蔵に侵入して新酒を失敬、酔ってふらふらつとしてたらお酒の貯蔵タンクに落ちちゃったといったところでしょうかー。でも警備もそこそこしっかりしていたみたいですし、何というか、お知り合いだったんですかー？」

警部補を名乗った小娘が上目遣いで尋ねてくる。香椎は黒縁眼鏡の奥の澄んだ瞳をじっと見つめながら、この小娘の質問に答えて良いものだろうかと考えあぐねていた。

ふわふわした声で、語尾を伸ばした気の抜けた話し方。着ているのはおそらく警察官としての制服だろうが、その雰囲気も相まって威厳が全く感じられない。身長だって私より小柄じゃないか。

「あの、佐々木さん」

「はい」

「この人、本当に大丈夫なんですか」

「大丈夫ですよ多分。こんなですが本部から送られてきた立派な刑事です」

「おいおいー、『こんな』とはなんだよ『こんな』とはー。これでも私、捜査主任なんだよー？」

不満に頬を膨らませる水津を眺めながら、香椎は思わず頬杖をついた。蔵を守るため、嘘を突き通さなくてはならない。そうやって身を固くしていた自分が馬鹿らしく感じさせた。

「で、どうなんですか？ 水元さんとはお知り合い？」

「ええ。そうよ。うちの酒蔵はね、あの男に買収されそうになってたのよ」

「そうなんですか？」

無垢な眼差しを向けてくる。何というかこの小娘、一挙一動が稚拙だ。

「先代が二ヶ月前に亡くなってね。経営が傾きかけてたの」

「先代というと、あなたの旦那さん——鴨志田久蔵さんのことですよ。あれ？ てことは……」

「そうよ。鴨志田は先々代の一人息子だったから。鴨志田の血が途絶えたといえ、そうなのかしら」

「そうですかー。あなたの後も、誰か引き継いでくれるといいですねー」

手帳に香椎の発した一言一言を書き込む水津。走らせていた。ペンを手帳から離すと、そのペンでつむじのあたりを

ぼりぼりと搔いた。

「あー、で？ えっと……香椎さん」

「香椎は下の名前なんだけど」

「じゃあ、茨木さん」

「じゃあ、じゃないわよ。」

「茨木さんは、昨夜の深夜二時頃、どこにいました？」

「は？」

水津が手帳から視線を離し、香椎のほうを向く。

「だから、昨日の夜です。深夜二時の——」

「ねえ、それってあの男が死んだ時間よね。私はその時間安芸津にある知り合いの蔵にいたんだけど。何、私のこと疑ってるの？ というよりそもそもあれって事故なのよね」

きよとんとする水津。彼女が一体何を考えてそのような質問を投げかけてくるのか香椎は理解できなかった。いや、

そもそもこの小娘のことである。何も考えていないのだから。ならば——

「ねえ。こっちはただでさえ商品がダメになっちゃって、

これからの話とか色々しなくちゃいけないのよ。それを、何？ 何を考えてるのか知らないけど、あまり長々あなた

の話に付き合ってる暇はないのよ」

「すみません。でもちよつと気になることがありまして」

「何？」

眉間に皺が寄る。一方で水津はどうやら鈍いのか、香椎

の苛立ちを気にすることなく手帳に目を戻して口を開いた。

「眼鏡なんですけどね、見当たらないんですよー」

「眼鏡？」

確かにあの男が持っていた覚えは、ある。が、しかし。

「あの男、私の前で掛けてるところ見たことないわ。コン

タクトじゃなかったの」

「いえ、彼はれっきとした眼鏡ユーザーだったみたいで

よー？ 酒蔵に侵入する気だったのに、何でわざわざ視界

がぼやけるようなことしたんでしょう」

「……さあ」

「ほかにも気になることがあつてですわー」

「まだ、何か」

「うーん……ちよつと来てもらつてもいいですか？」

水津はそう言うとは無を言わず立ち上がり、事務所の

外へと向かい歩きだした。

「ちよつと説明しづらくて。百聞は一見に如かずって言う  
でしょう？」

歩きながらも水津は勝手にぺらぺらと口を動かしていた。

「スマホつて、あるじゃないですか」

「あるわね」

「そう。なんかですわー、水元さん、この蔵に来るのに、

自分の会社の軽自動車でここまで来たみたいなんですよー

ですわねー、スマホなんですけど、持つて来ずにごこまで

来てたみたいなんですよ。専務さんなのにだめだわーつて」

「そう。ここにこつそり来てるのがGPSとかでばれない

ようにするためじゃない？」

「なるほどー」

本当は私が持つて来ないように言ったのだけど。そのの

何が問題なのだというのか。

「それにしても水元さんも悪い人ですわねー、他社のお酒

を盗んで勝手に飲んでたなんて」

「もう本当のウチの酒が飲めなくなるって理解していたん

でしょうよ」

「まあそうですねー。私もタンクについてる蛇口を捻ってそのまま飲みたいなーと思ってたんです」

「まさか本当にやってないわよね」

「仕事中なんでね、残念ですがまた今度自腹で買いますー」  
「つていうか、そうじゃなくて」

香椎は歩きながら、掌で前髪をかき上げ浅く息を吐いた。  
この小娘といると、何か調子が狂う。

急に訪れた沈黙に水津は何を感じたのだろうか、ひらりと後ろ歩きの体制をとると後ろ手を組みつつ香椎の顔を覗き込んでくる。

「茨木さん？」

少し、意地悪をしてやってもいいだろう。

「ねえ、水津さん。女が蔵を守るなんてことは、無理なのかしら」

きよとんとする水津。香椎が反応を伺うべく真顔を貫いていると、水津はふいに、憂うように流し目をした後まっすぐに香椎を見つめてきた。

この小娘、こんな顔もできたのか。

「……どうしたの？」

「いえ——」

この刑事、もしかして。

じつと見つめられる恥ずかしさに耐えられずに、香椎は思わず目を逸らした。そういえば、さつきから佐々木刑事の姿が見当たらない。

たかが小娘に見つめられて動悸が強まる。  
何なのか、一体、何が言いたいというのか。

「——そんな、人を試すような目ができるヒトに、酒蔵の経営ができないわけがないじゃないですか」

吐き捨てるように、にっこり。

「そう。ありがとう」

怖い。

ふと、なぜか直感的に香椎は水津のことをそう思った。

よく見るとこの小娘、すごく妖しい顔をしている。長い睫に覆われた瞳に吸い込まれそうになる。引き締められた薄い唇に、心まで締め上げられたようだ。

「ありがとう。気が紛れたわ」

本音では少し混乱していた。

「早く目的のところへ連れて行ってちょうだい」

どこに連れて来られるのかと思ひ冷や冷やしていたが、実際に連れて来られた先は、蔵から少し離れた国道の路肩に止められた見覚えのある水元の軽自動車であった。

「これなんですけどねー」

水津が口を開く。

「スマホのGPSは気にするのに、おかしくありません？」

「あら。一体何が？」

「軽自動車の側面、めっちゃでかかど『四神酒造』って書いてあるんですよ」

「当たり前じゃない。四神の車なんだもの」

「いやそうじゃなくてー」

後頭部をバリバリと搔く水津。この刑事、言葉に詰まると頭を搔く癖があるのか。

「GPSは気にするのに肝心の車の字は気にしないって、頭隠して尻隠さずっていうか、残念な人なんだなーって」

気付かなかった。てかあの男、本当に馬鹿だな。

まあいい。

「そのために、ちょっと離れたところに車を停めたんじゃないかしら」

「なるほど」

「というより、そもそも他人ひとの蔵で酒飲んでそのまま車で帰ろうとする男よ。残念じゃないわけがないじゃない」

「それもそうですね」

納得してくれたかしら。

言い聞かせるように、確かめるように水津を見る。水津は惚けたように軽自動車を見つめながら、やがて香椎の方を向き眉根を下げながら言葉を続けた。

「やはり、飲酒運転をするような男性は軽蔑しますか」

「——どういう意味かしら」

「ああ、その。お気を悪くして欲しくありませんけどね。」

その、旦那さん——先代・鴨志田久蔵さんのことです。彼もまた、飲酒運転による事故死と聞いています」

「香椎ちゃん？ ああ、確かに昨夜はうちにいたよ。深夜の二時頃も確かに」

老年男性によるあまり聞きたくない類の回答に、佐々木巡查部長は内心深いため息を吐いていた。

小さな上司・水津天海の命令で、わざわざ山を二つほど越えて安芸津まで来たというのに、待ち受けていた結果がこれである。

「確かに二時頃ですか。その、三時とかでなく」

「おうとも。わざわざ母屋の方に来てね。持ってきた酒瓶割っちゃったから掃除してくれませんかって」

やっぱり事故だったんじゃないか。

佐々木は目頭を押さえながらそうですかと一言呟いた。

そもそも、この件は本来事故として処理されるべき案件のはずだった。にもかかわらず、鶴の一声と言わんばかりに例の小さいのがしやしやり出て、自分たちだけ、この果たして意味のあるかわからない捜査を続けているのである。

『広島県警の白い悪魔』め……』

以前、いわゆるオタクの気がある同僚が、彼女のことをそう称していたのを思い出す。なるほど愛称なんてものは

事件の関係者——例えば被疑者なんかが恐れてつけたなんて、そんなご立派な称号ではないのだ。身内同士でつけられる、皮肉やかからかいがあつてつけられた、いわば仇名アダナである。

「——一応、その彼女が泊まっていたという蔵も拝見して宜しいのでしょうか」

「蔵に泊まれるわけないだろう。香椎ちゃんが泊まっていたのは納屋だよ納屋。まあいいさ。こっち来い」

連れてこられた納屋は、どちらかというのと離れの小屋といった感じであった。土倉のような外面に反して床も剥き出しの状態でなくフローリング張りにされており、確かにここなら一夜は過ごせそうなほどの立派なものであった。

「香椎ちゃんはねえ、本当に、鶴寿の蔵のために頑張ってくれていたもんだよ。気立てもいいし、こう、スカートとした良い性格してたもんよ」

佐々木が靴を脱ぎ部屋へと踏み込む横で、老年は延々と喋り続けていた。

「刑事さん、香椎ちゃんにもう会ったんだらう？ あれ、いくつに見えるよ」

「四八歳ですよ。調書で見ました」

「なんだよつまらねえ」

「随分と綺麗ですね」

「だらう？ あんな若くして綺麗でいられるのも、あれだよ、日本酒の、麴の力さ」

「そうでなくて、納屋が」

「そっちかい」

見たところによると、納屋の中には非常に整理されていた。整理されていただけでなく、部屋の隅から隅に至るまで、塵ひとつなく掃除が行き届いていたのである。

「だから言ったらう？ 香椎ちゃんが酒瓶割っちゃって、きれえーに掃除しましたよって」

「片づけられたんですか！」

「あたりめえじゃねえかよ。ほっといたら危ねえだらう？」

「そりゃそうですけど……」

小さい上司がぶちぶち言う図が思い浮かぶ。

「念のため、茨木さんの足取りもたどろうかと思っております」

まして」

「どうぞどうぞ」

「いえ、そうではなくて——そう、回収した、割れた瓶の破片ってどうしましたか」

「なもん捨てたよ。今日回収の日だったしな」

なんてこった。

酒瓶の破片から眼鏡の欠片が出てきたら面白いよねーと呑気に抜かしていた上司の不満顔がより一層リアルに思い浮かぶ。まさかとは思うが、もしその言葉が真実であったのだとしたら。

「厄介だなあ……」

「なんだい。おめえさん、香椎ちゃんのことを疑ってるのかい」

「あ、いえ。そうではなく私の上司が」

「とんでもねえ野郎だなそいつああ！」

突然の怒声に佐々木は思わず一歩後ずさった。老年は声を荒げると唾をぺっぺと吐きながら一氣にまくし立て、

佐々木の存在をそっちのけで大仰に語り始めた。

ちなみにそのとんでもない上司は野郎でなくスケである。

「香椎ちゃんはなあ、あんなに綺麗だからわからねえかも  
知れねえが、昔むかしから、ずーっと苦勞が絶えなかったんだ  
よ。子供の頃から真面目な子で、淑女を絵に描いたような  
子だった。それを、周りはやれ女のくせにだの生意気だの、  
好き勝手言いやがってもう可哀想なことこの上なかった  
さ！」

でもそこは流石香椎ちゃんの良いところだよ。好き勝手  
言ってきたやつやつの文句も何一つ言わねえで、かといって、  
悲劇の姫さんぶることもなく、黙々と、じいっと耐えて、  
頑張ってくれてたもんさ」

窓の外を見上げ、懐かしむように声を和らげると、老年  
は慈しむように壁を撫で、その後はただぼつりぼつりと話  
を続けた。

「だからよ、刑事さん。香椎ちゃんはその、人を簡単に  
殺めちゃうような子じゃねえんだって。あの子が小さい頃  
から見守ってきたあしの言葉だ、信じてくれよ」

まさかここまで懇願されるとは思ってもみなかった。

老年は乾いた目尻に薄く涙を浮かべると、まるで我が子  
を連れ去られた母猿のように佐々木の上着を掴んで乞うて

きた。

「頼む。本当だ。ツレが事故で死んで、香椎ちゃん、これ  
から頑張らなきゃって時なんだよ。だから、な？ そつと  
しておいてやってくれよ……」

どうしてここまで必死なのか。佐々木は、老年の思わぬ  
変化に戦っていた。

まさか、まさか——。

「わかりました。上司にもそう伝えておきます。安心して  
ください。そもそもこの聴取だって形式的なものなんです。  
今回はその、不幸な事故だったんですよ」

「ああ。頼むよ……」

佐々木から離れ、深々とお辞儀をする老年の男性。

そういうことかよ。

佐々木は確信してしまった。

こいつ、知ってるんだ。茨木香椎が昨晩何かしたことを。

茨木香椎が、水元陸を亡き者にしてしまったことを。

「やり直し。そんな情報とつくに知ってるよ？ 一体君は

何のために安芸津まで行つたの？」

電話の向こうでぶーぶーと文句を垂れる上司の声を聞きながら、佐々木は内心上の空だった。

冗談も大概にしてくれ。これは事故じゃなかったのかよ。しかも一番の被疑者と思われる人物は被害者の死亡時刻、現場と思われる八本松の蔵にいなかっただなんて。どこの二時間ドラマだ。

「そんなこと言われましても、こっちは端っから事故だと思つていたのにこれ以上何を聞けば良いかなんて」

「茨木香椎は車の免許持ってなかったけど、車の運転が、本当にできなかったのか、とか、あと、そう、車だよ、車。

茨木香椎さんの旦那さん——鴨志田久蔵さんが飲酒運転で事故死した件。あれって、本当にただの事故だったのかな」

急に声のトーンを下げる。普段きやつきやと言っている分、意外とその声には重みがあった。

「さつき、香椎さんと話したんだよね。何で久蔵さんは、そんなことしたのかって」

「まあ、こんな田舎ですし、もしかしたら習慣化していたのかも」

「ねえ馬鹿なの？」

「……」

「……久蔵さんってね、飲めなかったのよ、お酒。名前、久蔵なのにね」

「え、そうなんですか」

それは知らなかった。そこそこの蔵を治め、それも現場に出る杜氏なら、普通に酒も飲めるものだと考えるまでもなく認識していた。

「てか何ですか、名前がなんとかって」

『試し酒』よ。知らない？ 落語の演目」

「知りませんよ」

「まあいいわ——でも、こんなことも言つてたの。佐々木君さ、三遍稽古って知ってる？」

「それも落語ですか」

「そうそう。今はビデオとかで録音できるからいいけど、昔はお師匠さんが三回までしかお手本みせてくれなくて、弟子はその三回の稽古だけで、師匠の技を全部、習得しなきゃいけないんだって」

「で、それがどうしたんです」

「頭使ってる？ 余計な栄養行ってるならそのぼさぼさの髪抜いてあげるよ？」

見た目イモイガキのくせに、いちいち癩に障る言い方をする。まず自分の三つ編みを引っこ抜けばいい。

「久蔵さんもそうだったのよ。』自分は酒があまり飲めないから、三回の試し酒で、全てを見極めなくてはならない。でもそのおかげでその三回に集中して全てを賭けられるし、そこに不服は全くない』って」

「それは何というか、偉いですね」

「ねえ、何も考えてないのに雑な返事しないでくれる？ ……まあいいけど。とにかくね、どうしてそんな人がそんなでろでろになるまでお酒を飲むかしらってっこと」

なるほど。内心軽く頷く。

スポーツマンは過剰な筋肉をつけたがらないと言うし、それこそワインのソムリエは香辛料などの刺激物をあまり摂りたがらないという。

「ってことは——」

「そうね。やっと結論が言えるわ」

電話の向こうから、水津のすつと息を吸う音が聞こえる。

「鴨志田久蔵もね、殺されてたのよ」

吸い込まれそうなほど燦然と輝いていた碧瑠璃の海が、思わず微睡んでしまうようなオレンジ色に変わる頃。

突然にどこからともなく湧いてきた我が上司・水津天海とくまきんぼし女史を見て、先の老年——名を寅隈金星というらしい——は大層驚いている様子であった。

「どうもー、広島県警捜査一課警部補の水津天海ですー。この度はお世話になりますー」

「ど、どうも」

あまりにも拍子抜けしたのか、寅隈は事務机の向かいに座る見た目小娘なのを相手に絆纏を肩からずらしたまま深々と頭を下げていた。

水津も水津である。先ほどまでの気迫はどこへ行ったのか。猫を被っているのか、それともスイッチのオンオフが激しいのか。

「おまえ、こんなちびっこいのに普段からへこへこしてるのか。大丈夫か広島県警」

ほっとけ。

「えっと。こんなちびっこいので良ければ、一つ二つほどご質問しても宜しいでしょうか？」

「いえ、そりゃ、どうぞどうぞ」

意味も分ならず萎縮する寅隈。そりゃ、突然こんなのが現れたら混乱もするわ。

「調べによると、亡くなった水元陸さんと茨木香椎さん、中学からの同級生だったみたいですね」

「え、ええ。香椎ちゃ——お嬢さんはこの安芸津の町出身で、大学の入学までずっとご実家の方に住まわっていたんですよ」

何をそこまで畏まっている。大丈夫か寅隈酒造。

「ご実家というのは、確か果樹園とかでしたっけ？」

「ええ、そうです。茨木さんとこはずっとみかん園をしていて、お嬢さんも小さいころからお手伝いをなさっていたそうです」

「例えばどんなことですか？」

「そこまでは……お嬢さんとは朝の登校時に挨拶を交わしたりが主でしたので」

「その割には随分お慕いなさってるんですねー」

「そりゃあ、お嬢さんはご立派な方ですので。その刑事さんにも話しましたが、お嬢さんは、雨にも負けず風にも負けず、蛍の光に窓の雪、大変に苦学なさって京都の名門国立・伏見大学に合格なさったんですよ。町の誇りです」

「伏見大学ねー。じゃあ、鴨志田さんと出会ったのもそこですか？」

「そうです。久蔵さんは伏見の蔵へ修行に出っていたのですが、そこで」

「ふーん」

また頭をバリバリと搔く。人の頭髪をより自分の毛を抜く方が早いんじゃないか。

「ちなみに」

頭を搔いていた手を止め、眼だけを寅隈のほうへ向ける。

「水元さんも、香椎さんと同じ中学でしたよね？ というより、高校も、あと進学した大学の町までほっとんど一緒。彼、確か私立の京都理科大でしたし」

口づくむ寅隈。なるほど。

「偶然ですか？」

「……」

寅隈は拳を固く握ると、俯いたまま押し黙ってしまった。額から汗が滴るように流れる。

「まあ、いいですけど」

「ちつ、違う！ お嬢さんはそんな方じゃ」

「私、まだ何も言ってますんよ？」

まただ。水津は気色が悪いほどの無邪気な笑顔を浮かべると、ふふと笑って机に前のめりになってもたれかかった。

「香椎さん、車の免許持ってませんが講習所にも行ったことないんですか？」

「ええ、こっちにいるうちは一度も……」

「大学生の頃ですか？」

「それは、はい。木原が証明できると思います」

木原ちよつと来い、と寅隈が呼ぶと、蔵の奥から体格の良いいかにも玄人らしい大男が、そのいかつい表情と体格に似合わずひよっこりと顔を出してきた。

「君、伏見大学だったよね。お嬢さんと同じ」

「はあ、そつですけど」

「茨木のお嬢さんだけど、車の教習所と行って行ってたっ

けか」

寅隈が尋ねると、木原はごつい顔をしかめつつ大きく首を傾げた。

「さあ——多分ないんじゃないですかね。もう三〇年以上も前のことなんでわかりませんが」

「そ、そうかい……」

小刻みに震える寅隈。

「どうしたんですかい」

「いや、そうか。ありがとさん」

いかつい顔で軽く会釈した後これもまた身軽に引っ込む木原。一方で、寅隈は石のように固まり、ただ黙って項垂れていた。

「——まあ、調べればわかることですけどね」

水津の素が垣間見える。

「寅隈さん」

「……何でしょう」

「私は、茨木香椎さんが水元陸さんを殺害したものと見えます。あの納屋で水元さんを殺し、水元さんの軽自動車で八本松の蔵まで運び、一緒に積んできた原付で何食わぬ顔

で帰ってきたんだと確信しています」

「そんな馬鹿な……！　だって奴は、肺の中まで鶴寿の酒まみれに——」

「そうですねー。鶴寿の酒まみれになつてねー」

寅隈の動きが止まる。核心を突かれたように感じる一方で、自分がどんな過ちを犯してしまったのがわかっていない様子である。

「……」

「私ですねー、今回の件で初めて酒蔵つてところに行つたんですけどねー？　思つたんですよ。なんてたくさんの、水とか醪もろみとか、いろんな種類のタンクがあるんだらうって」

「……それが、」

「どうして皆さん、最初っから清酒の貯蔵タンクに落ちた前提で話せるのかなつて。香椎さんも、せっかくの今まで全従業員が丹精込めて作った酒が全部ダメになつてるかもしれない瀬戸際のはずなのに、ずーっと冷静だったんです。だって死体ですよ。衛生面とか一番気になつて仕方ないはずなのに。——どうしてなんでしようね？」

両手で頬杖をつく水津。しばらく寅隈の回答を待った後、

答えないままどんどん息遣いが荒くなる彼をよそに、水津は黙って立ち上がるとそのすぐ隣まで歩み寄り、耳元で、小さく囁いた。

「——何を、見てしまったんですか。あなたまで、余計なことには手を染める必要はないんですよ」

水津が肩に手を添える。瞬間、寅隈は椅子から転げ落ち、見殺しにしてしまった人間の幽霊でも見たかのように屍餅をついたまま後ずさり、叫んだ。

「知らない！　あつしは本当に、何もつ、本当に何も……：知らないんだ！」

頭を抱え慟哭する寅隈。水津は何も言わず、そのあまりにも小さな背中をじつと眺めている。

悲哀、同情、憐憫。そのどれとも言えない瞳をくつと前へと向けると、水津はただ「佐々木君」と小さく呼びかけ迷うことなく歩き出した。

「水津さん、待つてください。どこ行くんですか」

「茨木さん家」

「え、でも」

「何」

振り返ることなく歩き続ける水津。

「どうするんです。まさかこの蔵の貯蔵タンクに落としたつていうんですか、そんなの無理です！」

「西条の酒は中硬水から、安芸津の酒は軟水から。成分の違いで鑑識にばれるつてのなら承知済みよ」

「車の運転の件は」

「原付じゃ小柄な男とはいえ人間一人運ぶのは無理だろうね」

「それじゃあ！」

「それをこれから調べに行くのよ。きっと証拠もそこら辺からわかってくる」

「小さいくせに足が速い。すばしっこいというのだろうか。なかなか彼女に追いつくことができない。」

「大体あんなどころだろうなーっていうのはあるけどね」

夕風が終わり、陸風が吹いてくる。彼女はその風に身を任せ、躊躇うことなく進み続けた。

「この一件、よおーく、わかったよ」

後篇に続く

※この物語はあくまで創作です。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。あしからず。